

六花

RIKWA

9

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)
cover design Yuna Mizuno

梅は実に文のお礼に日をかけて
靴裏に花の踏絵や二三片
水音に敏きいち日麦の秋
母の血の我に七分や麦の秋
麦畑にかがめば黄泉の如き澄み
沐浴の雀よ余花の雨あがり
花山院用前八十八夜蕎麦
菊苗を育ててゐたる尼の裔
浮島へ水神さんが跳びにけり
唐傘をたしかに外れてゐし牡丹

麦秋忌
5月26日

弁天の水を代田へ送りけり
余花の風弁財天へ太鼓橋
鯉のぼり百にしづかな山羊の昼
やはらかき蚊の浮きぬたる新樹の夜
つくばひに立ち直りたる夏あざみ
金色の声ひらひらと夕ひばり
縁先の蘇芳に染むる遠嶺かな
亀の鳴く闇さかさまな記憶かな
よぼよぼと斜面の露を摘みにけり

亀田君摘みくれし薊

雪しろの濁りにあらぶ光かな
湖近く雪解の芝を踏みにけり
公魚の魚籠をしたたる水昏るる
残り鴨湖の広さを楽しめり
雪解して轍に生まれたる命
てのひらにひらと哀しき春の雪
古戦場の声かくあらむ雪解川
春手套啞へ若狭の水を汲む
鵜の瀬なるどころ逆巻き雪解川
雪催なれど雪来ぬ若狭口

普請場に木屑ちらかる遅日かな

佐津のぼる

草餅や茶の間に通す妻の客

佐津のぼる

ふしんばにきくずちらばるちじつかな さつのぼる
くさもちやちやのまにとおすつまのきやく さつのぼる

普請場に木屑ちらかる遅日かな

草餅や茶の間に通す妻の客

雪残る陶狸の笠の傾きに

茂吉忌や淡雪は葉にのりしのみ

恋猫の悶着のこゑ闇にあり

俳句が川柳と大いに違うところは季語の本意を深く詠んでいるかどうか。森澄雄は「季題の置き方」として「ここにありましたという季題でなく、ある種の世界を含めるような置き方をしないと句が生きてこない」と説く。日の入りが少し遅くなると大工仕事がかどり、木屑も増えて散らかるのである。遅日なればこそを木屑(物)に託して詠んだ。理屈も何も言わず、目の前にある物で季題の本意を示し、日暮れまで働く大工さんへの情も伺い知ることが出来る。木屑の真新しい匂いさえ漂う。「草餅」の句の解説は不要だろう。味がある。

雪卿集

白
梅

永田万年青

白梅の広がり山を隠しけり
白梅の枝を引き寄せ嗅ぎにけり
公魚の竿しならせて光りけり
雪嶺に舟向き変ふる湖北かな
三寒に負けて四温に勝ちにけり

揚
雲
雀

松本文一郎

揚雲雀石の水切るひいふうみい
マンシヨシの水松に遊ぶ春の鳥
マネキンの歩き出しさう春シヨール
春 拾 佃 界 隈 吟 行 す
三月の空の青なほ海の青

雪卿集

開運の梅

志方章子

鉢植糸の蔭の臺摘む夕べかな
砂浜を大きく使ひ若布干す
開運の梅とありたり手を合はす
紙白の雲さながらに梅の園
掛軸の和敬清寂梅匂ふ

おぼろ月

出口

誠

握つてもそのままに咲く雪柳
菜の花の上のほうのみ残りけり
木蓮の茶色となりて散りにけり
春の昼日かげに群るるオートバイ
おぼろ月うす桃色に夜染める

雪卿集

陶
狸

佐津のぼる

普請場に木屑ちらかる遅日かな
草餅や茶の間に通す妻の客
雪残る陶狸の笠の傾きに
茂吉忌や淡雪は葉にのりしのみ
恋猫の悶着のこゑ闇にあり

わかさぎ

升田ヤス子

姫様のやうな良き声春の鴨
わかさぎに絹のひかりの余呉の湖
雪代にすすぐ田芹の髭根かな
脚跡の乱るる田面鳥帰る
春荒れの斎竹さわぐ鶉の瀬かな

雪樹集

公魚

藤生不二男

公魚の糸の光りて釣られけり
公魚の魚籠を光の射抜きけり
追はれつつ追ひつつ余呉の雪解水
高きより雪解雫や杉木立
容赦なく日の差しきたり春時雨

野遊び

廣畑育子

湖光る今帰り来し諸子舟
舳挿して枯山水の湖北かな
野遊びの一斉に湧く笑ひ声
麦青む一直線の用水路
青空をこそ入れねばと梅の花

蛩雪譚

六甲選

二十八年六月号鑑賞

去来抄（修行）に「句に姿といふ物あり。句に語呂といふ物あり。句走りの事なり。語呂は盤上を玉の走るがごとし。滞りなきをよしとす。又柳糸の風に吹かるるごとく、優をとりもよし。只溝水の泥土に流るるがごとく、行き当たり行去当たりなづみたるを嫌ふ也。其外巻中に一句二句曲をなせる句はあるべし。夫れとても語呂の渋りたるは悪し。是等は一手の外なり」とある。

句作の時の注意である。否、推敲の時の指南であろう。①句には姿がある。例えば去来の、

雉子のうろたへて鳴く

を、「去来よ、お前はまだまだ句の姿というものを知らないかあ」と言つて、

妻呼ぶ雉子の身を細うする

にしなさい。と添削した。これは「うろたへて鳴く」では「頭でこうであろうと考えて詠んだ理屈があるから、具体的に雉子の姿を写生した句に添削したのである。また句の調子がぎくしゃくしているのも良くないというのだ。リズム良く読み下せることにも気をつけないといけないとも。基本はあくまでも五七五で読むことを大切にしたい。もう一つ、大切な物に「句の位」がある。品格である。その最たるものに特殊性で詠んだものがある。例えば「卯の花のたえ間叩かん闇の門」という奇抜な着想を一応芭蕉は褒めたが、去来は「この句は奇抜な発想だけで高位の句とはいいがたい」と言つた。珍しいことや理屈を言つたりすれば句の品位は低い物になるとい

うのだ。頭で考え、機知を働かせ、発想の奇抜さや面白をねらうのはいけないよというのだ。芭蕉は「風雅に理屈なし、理屈はおのれおのれが心の理屈なり」と言っている。表現の面白さ、発想の奇抜さ、才気走ると俳句の本当の姿が遠ざかる。先月号で「春尽きて竜舌蘭は舌切れ」という句を発表したが、不覚である。この句は是非没にさせていたきたい。主宰はその反省を深くしながら、ここでは自らのことを棚に上げて厳しく鑑賞する。

鉢植系の露の臺摘む夕やかな

志方 章子

ささやかで風流な露の臺摘みである。夕飯の一品に加えようと摘んだ。露の臺の料理方法は知らないが、肴として手短に天ぷらかお浸しがいいのだろう。味は少し苦みがあるのが春の味わい。しかも鉢植えの露の茎だからほんの少しである。もう少し味わいたいとするのが一等の料理なのである。満足させては飽きが来るのが早い。男操縦法もしかり。

砂浜を大きく使ひ若布干す

若布を刈る時期には、砂浜一杯に若布を干す。淡路島などでは棹を組んで洗濯物を干すように若布のすだれが出来る。若布も海の恵みなら、砂浜も海の恵みなのである。皆が勝手に若布を広げるのでなく、その砂浜にも住民の不文律があつて互いに平等に使うようになっていく。そこを含ん海辺の生活を詠んだ。

開運の梅とありたり手を合はす

神社の境内に咲いた梅の花であろう。梅の花にどうすれば

運が開けるのか興味のあるところ。で、調べて見た。どうやら開運梅という鉢植え用八重咲きの紅の品種があるらしい。その梅の木が大きくなって名札が「開運」とつけられていたのかも知れぬ。そのほか考えられるのはお神銭を括つておけば運が開けるのかも知れぬ。たしかに梅の花にはそういう気分が漂っている。桃の実(種)が邪気を払う話は古代からあり、同じ薔薇科だから、開運をもたらすのであろう。この句はたまたま開運の文字があつたので、ついでに手を合わしたので、真剣な悩みを解決して欲しいから手を合わせたのではないだろう。日本人にはそのようなところがある。

紅白の雲さながらに梅の園

紅白の梅の雲がたなびくのもいいものである。梅の盛りには桜と違つて雲か霞のように見えることがある。それが紅白のお目出度い瑞雲なのである。春の魁け。

掛軸の和敬静寂梅句ふ

「和敬静寂」は正しくは「和敬清寂」で茶の言葉。作者は「あえて掛け軸通りに詠んだのであろう。」「和敬清寂」は主人と賓客がお互いの心を和らげて謹み敬い、茶室の備品や茶会の雰囲気や清浄にすることという意。利休の考え出した四字のように思えるがそうでもないらしい。「静寂」でも「清寂」でもかまわないと思うが、茶であれば清の方が精神に適つていよう。狭い茶室で膝つき合わせるのだから、互いの鼓動息遣いまで伝わる。従つて今何を考えているか互いに偽れない座だから、清浄でなければいけない。点前のときには室を浄め、主客共に何もかも浄めて対うのである。

握つてもそのままに咲く雪柳

出口 誠

雪柳は真つ直ぐ伸びる枝に見えるが本当はねじれている。その捻れが気になつたのであるうか。枝を握つて見てもなにごうすることもなく平然と咲いているのである。下手にねじり返すと折れて枯れる。と鑑賞してみたのだが、もし違つていたらごめんなさい。

菜の花の上のほうのみ残りけり

上の方とは茎が伸びている先端のことで、花が咲きのぼつて先端の方に残つているというのだろう。それはすなわち菜の花に終わりが近づいており、それを惜しむ気持ちで見ているに違いない。この句と同じ場面かどうかわからないが、わが家も葉ボタンが茎立ちし、これから菜の花が付こうというときに妻が剪つてしまった。